接触言語の変容（Ⅱ）

——ジャマイカン・イングリッシュのライフサイクル(1)——

杉　本　豊　久

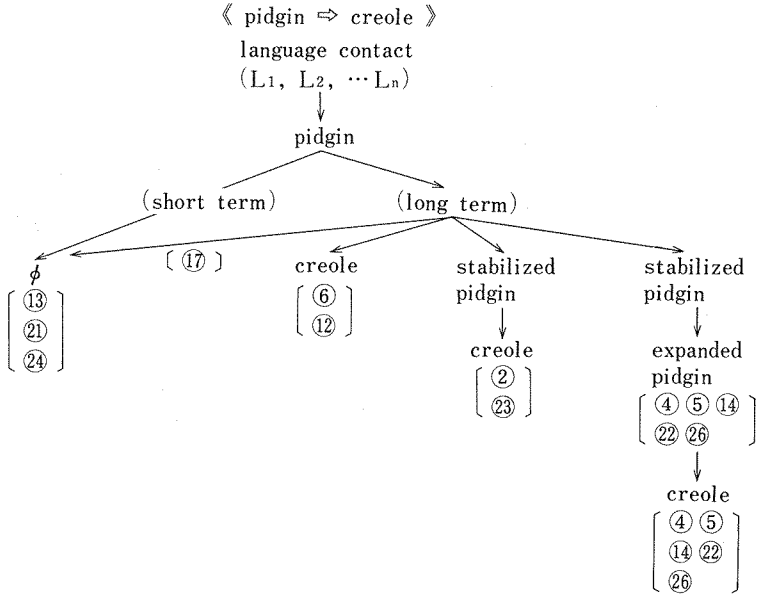
1.　はじめに

共通の言語をもたない人々が，ある特定の目的（例えば，商取り引き）のために相互理解が必要となり，接触を続けると，それぞれの側の母語とは別に，ごく小規模な言語体系が生まれる。これがピジン（pidgin）である。お互いの母語に比べて，語彙数が限られ，文法構造も単純化され，表現形式や発話スタイルの使用域の幅（文の機能の範囲）も狭いために，従来は「間に合わせの（makeshift）言語」とか，「混成の（mixed）言語」などと呼ばれてきた。しかし，それでも一定の限られた目的を果たすのには十分な程度の伝達機能を備えた補助言語として，世界各地で(特に，アジア，アフリカ，太平洋諸島の多言語使用地域において)，共通語(common language）あるいはリングァ・フランカ（lingua franca）として広く使用されている。

ところが，この種の多言語社会で，ピジンの共通語としての有用性が高まり，人々の主要な伝達手段として益々多くの住民が，より広範な場面でピジンを使用するようになると，次の世代の子供は，親達の母語よりも，このピジンをより多く聞いて育つようになる。そして，次第に，ピジンはその地域の人々の母語としての地位を獲得してゆく。世代交代が進行するにつれて，母語としての言語使用が強化され，広く普及し，その結果生ずるのがクレオール（creole）ということになる。

このピジンからクレオールへの過程は，実は言語発達という一連の大きな流れの一部を成す二つの段階とみなすことができる。これを人の一生に喩え，ピジン・クレオールのライフサイクルを概観してみると，言

語接触の結果生じたピジンは，いわば新たな言語の誕生である。そして，このピジンは少なくとも２種類の母語の合理化（rationalization）のプロセス[1)]の結果として生まれるものである。ところが，一旦ピジンが誕生すると，次にはクレオールを目指し，新たな道を歩むことになる。つまり，クレオール化が始まるのである。このプロセスは，ピジン化とは逆に複雑化（complication）へのプロセスであり，言語の成長プロセスといえる。この期間の発達過程は，人間に喩えれば，さながらクレオールといういわば成人式を前にした思春期の若者のごとく，実に不安定であり，しかも各地域によって様々なプロセスを経ることになる。次の図は，ピジンからクレオールに移行する各種形態のパタンを示したものである（なお，端末の〔　〕内に，その具体例が示されている。各数字は，次に図示した「世界のピジン・クレオールの分布図」の数字に一致する）。



Distribution of Pidgins and Creoles in the World

1. Afrikaans Pidgin
2. Bagot Creole English
   (North Australian Creoles)
3. Bazaar Malay
   (Bahasa Indonesia)
4. Bislama
   (Beach-la-Mar)
5. Cameroon Pidgin English
6. Caribbean Creole English
7. China Coast Pidgin
   (Chinese Pidgin English)
8. Chinook Jargon
9. Gullah
10. Guyanese Creole
11. Haitian French Creole
12. Hawaiian Pidgin/Creole
13. Korean Bamboo English
14. Krio
15. Philippine Creole Spanish
    (Spanish-based Creole)
16. Pitcairnese Creole English
17. Sabir
    (Mediterranean Lingua Franca)
18. Sango
19. Sranan
20. Swahili Pidgins
21. Tây Bồy
22. Tok Pisin
    (Neo-Melanesian)
23. Torres Strait Creoles
24. Vietnam Pidgin
25. Virgin Island Dutch Creole
    (Negerholland)
26. West African Pidgin English

——— T. Sugimoto (1989)

例えば，朝鮮半島における Korean Bamboo English，フランス統治下のヴェトナムにおけるフランス系ピジン Táy Bóy，ヴェトナム戦争時代の Vietnam Pidgin などのように，比較的短期間で接触が断絶し，消滅していったピジンもあれば，Hawaian Creole や Jamaican Creole のように比較的早い時期にクレオールに達したものもある。また，多言語使用地域での共通語として発達したアフリカ西部のシェラレオーネの Krio や West African Pidgin，バヌアツやフィージーなど南太平洋諸島の Bislama (Beach-la-Mar)，さらにパプアニューギニアの Tok Pisin などのように，安定期を経たピジンがさらに発達し (expanded pidgin)，ラジオ放送，新聞などの報道機関で使われたり，独自の文学を発達させたりする段階にまで達した後に，クレオール化が進行しつつあるものもある。

さて，今回の小論では，これらのうちで，特にジャマイカン・クレオールに焦点を絞り，西インド諸島におけるジャマイカン・イングリッシュの位置付けとその発生・成長過程を追いつつ，それに伴う諸問題を指摘する。

2. ジャマイカン・イングリッシュの背景

ジャマイカは，キューバ島の南方約150kmのカリブ海に浮かぶ島国で，約300年に及ぶ英国の植民地を経て，1962年8月6日に独立し，英連邦の一員となった比較的新しい国である。人口は約239万人 (1984)，面積は11,430km²で，長さ234km，最長幅82kmの東西に細長い小島だが，カリブ海の島々の中では3番目に大きな島で，キューバ島，ハイチとドミニカ共和国から成るヒスパニオラ島，プエルト・リコ島などと共に大アンチル諸島 (Greater Antilles) を構成している。島の大部分は丘陵と山地で，平野は全島の15%を占めるにすぎず，中央を走る山脈 (ブルーマウンテン) は東部に高く，最高点は2,500mにまで達する。丘陵地は温帯に近い気候だが，低地は熱帯であり，例えば首都 Kingston では年平均気温が26.7℃である。国の主な産業は，サトウキビ，バナナ，コーヒーなどの熱帯農業と地下資源のボーキサイト，それに美しい自然を生かした保養地としての観光事業である。サトウキビは植民地当初からの主作物で，奴隷労働によるプランテーション農園で繁栄し，19世紀末の奴隷解放に

よりやや衰えたものの，現在でも第一の作物であり，砂糖の副産物ラム酒は有名である。また，ブルー山地で産するコーヒーは高級品（ブルーマウンテン）として我が国でも良く知られている。

ジャマイカをはじめとするカリブ海諸国では，ヨーロッパの諸言語（スペイン語，英語，フランス語，オランダ語など）と現地語との間に生まれたピジンに由来する各種クレオールが話されている。ただし，この地域での現地語話者とは，島の主な先住民族であるアラワク（Arawak）民族というよりは，16世紀から18世紀にかけて，ヨーロッパ人により，砂糖圏を中心とするプランテーションでの労働力確保のために，西アフリカから奴隷として輸入されてきた多数の黒人達を指す。したがって，現地語とは，彼ら西アフリカ黒人の現地部族語を指すことになる。このような各種クレオールの中で，英語を基礎とするクレオールが使用されているのは，ジャマイカが最も多く約200万人，ヴェネズエラの東部沿岸に浮かぶトリニダード・トバゴ（100万弱），南米北東岸のガイアナ共和国（75万），ウィンドワード諸島のバルバドス（25万），バハマ諸島（20万），さらにウィンドワード諸島のグレナダ，セント・ビンセント，リーワード諸島のアンティグア，モンツァラト，セント・キッツ，ネビス，アンギラ，バージン諸島（各10万以下）などである。これらの国々では約３世紀に及ぶ英国の領土としての歴史があり，常に英語と接触し，その影響を受けながらクレオール化が進行してきたため，英語，それもイギリス英語に比較的近いものとなったのである[2)]。

一方，南米北東岸のスリナム共和国で話されている Sranan（Taki-Taki），Saramaccan 及び Djuka の３種類のクレオールは，元来は英語系クレオールであったものの，17世紀後半オランダ領になってから，約300年に及ぶクレオール化プロセスを英語との接触なしで経たために，英語から分離発展し，英語話者にも理解不可能な程になった例で，前述の他のクレオールとは好対照をなす。しかし，これはあくまで例外的なケースであり，英領としての歴史をもつ大部分の西インド諸島及びその周辺地域では，英語による支配・教育が行われてきたわけで，その社会的背景がクレオールに反映されている。

さて，コロンブスが３度目の航海で1494年にジャマイカの島を発見した時に，この島には Arawak（Indian）民族という先住民がいた。彼らは，カリブ海の主として西部の島々，今日のヴェネズエラの大部分，それに

ガイアナ海岸，アマゾンデルタの一帯などに分布していたといわれる。また，カリブ海東部の島々，今日のガイアナ内陸部などにはCarib(Indian)民族が，さらにガイアナ東部及び南部，今日のブラジル北部・東部地域などにはTupí民族やGuaraní民族が分布していたので，これらの部族間での食料・加工品の流通などに伴って，言語間の接触があったことは想像に難くない。そして，スペイン人やポルトガル人の植民活動以降は，彼らによるこれら部族の言語からの借入及び，その後の他のヨーロッパの諸言語への伝播も起こった可能性が高い。事実，*cashew* や *macaw* の派生が報告されている[3)]。

cashew<*acajou* (French)<*acaju* (Portuguese)<*acajú* (Tupí)
macca ('prickle ; thorn')<*macoya* (Spanish)<*macoya* (Arawak)

ジャマイカでは1509年から1655年までスペイン人による統治が続くが，この間に先住民のArawak民族は，ヨーロッパ人のもち込んだ疫病のため，あるいはスペイン人達の手でほぼ絶滅されたとされることから，Arawak族の言語からJamaican Englishへの直接の影響の可能性はまずないと思われる。もしも仮に，スペイン人に服従して，西アフリカから来た黒人奴隷達と共に生き残ったり，彼らと混血したArawak族の住民が存在したとしても，それによってArawak語が存続したとは考えにくい。したがって，Arawak語の語彙が現在のJamaican Creoleに存在するとすれば，それは前述の例のように，スペイン統治時代にあらかじめスペイン語に流入したものが，さらに英語（Jamaican Creole）に伝播したものと考えざるを得ないであろう[4)]。

3. ジャマイカン・イングリッシュの発生

1655年にクロムウェルの遠征軍がこの島を征圧し，英国による統治が始まる。ほとんどのスペイン人達は追放されるか，捕虜となったが，彼らが西アフリカから送り込んだ黒人奴隷達の一部，約250名の逃亡奴隷はそのままこの島の山岳部に残り，いわゆるMaroon settlements（逃亡奴隷移住民）となった[5)]。

当時のクロムウェル軍は7,000～8,000人に及ぶ将兵から成り，その後

の Jamaican Creole の形成に少なからず影響を及ぼしたと思われる点で重要である。このうち約半数はイングランドの各地連隊から召集された者達であり，あとの約半数はバルバドス（Barbados），セント・キッツ（St. Kitts），ネビス（Nevis）及びモンツァラト（Montserrat）などのリーワード諸島（Leeward Islands）の出身者達で編成されていた。

一方，セント・キッツ，ネビス及びバルバドスの各島々は1620年代以来の植民の歴史をもち，1650年代までにはこれらの島ではクレオールのパターンがすでに形成されていた可能性が高い。ただし，その形成過程については定かではない。つまり，独立して（独自の）発達していたのか，あるいは奴隷貿易によるピジン英語という共通の基盤のもとに発達したのかは定かでないが，それ以前のポルトガル系ピジンの影響を多少受けていたかもしれない。これらの島々は，引き続きジャマイカという新しい植民地に植民者及び奴隷を供給することになる。また，英国本土からは，主として西イングランド及びアイルランドの出身者達が年季奉公契約書によって雇われた召使いとして，当時の貿易港ブリストル（Bristol）からジャマイカに向けて出航している。

さて，西アフリカからの奴隷達がジャマイカに来て最初に習得した言語（英語）は，いわゆる植民地英語（Colonial English）であり，具体的には，おおむね中産階級にその端を発する発話であるが，上層，下層両方の階級の特徴も多少混入しており，しかも英国本土の各地域と，それ以前に確立していた北アメリカ及びカリブ海の植民地の地域的特徴を盛り込んだ英語ということになる。しかし，奴隷達が直接接触したのは，主として農園の経営者達ではなく，農園で帳簿係や奴隷の監督などをしていた年季奉公人や召使い達の話す英語であった。しかも，当初奴隷達が習得する必要のあった英語のレベルは，農園での労働の際に意思疎通の必要のあった限られた白人達とのコミュニケーションに堪え得る程度のものであったわけであるから，一般の白人の話す植民地英語の基準からすれば，極めて初歩的で未熟なものであったと考えられる。それに，奴隷達自身の能力，意欲（態度）あるいは白人の英語との接触の度合いなどの違いにより，実際にどの程度の英語を習得したのかについては，かなりの個人差があったと予測される。

当時の奴隷達が習得した英語に反映された（影響を与えた）と思われる今ひとつの要因は，彼らの母語である西アフリカ諸語の干渉である。

残念ながら，この時期の奴隷達は，アフリカで船積みされた港の名前のみで登録されていたこと，又当時の奴隷商人達は，広大な内陸部から無数の経路を通じて奴隷を獲得していたことなどから，奴隷達の使用言語についての確実な情報は極めて乏しい。しかし，ジャマイカでの植民が始まって最初の50年間で，最も多数を占めていたのは the Royal Africa Company のあったゴールド・コースト（the Gold Coast）及びその内陸部地域からの奴隷達であり，Akan-Ashanti 系言語を話していたと思われる。次に多かったのは Dahomey 出身者達で，大部分が Ewe 語話者と考えられる[6]。

17世紀の後半にかけて，奴隷人口の増加は著しく，1675年までに白人約9,000人に対し，黒人奴隷は9,000人～10,000人と白人人口を上回り，さらに17世紀の終りになると，白人人口は9,000人～9,500人とあまり増加しなかったのに対し，黒人人口は40,000万人にふくれ上がった。次の表は，各年（1658年～1734年）ごとの白人と黒人の人口と比率の概略を比較したものである[7]。

	《白　　人》	《黒　　人》
1658年	4,500（76%）	1,400（24%）
1673年	8,564（47%）	9,504（53%）
1690年	8,500（18%）	40,000（82%）
1734年	7,644（ 8%）	86,546（92%）

1740年には白人１人に対し，15人の黒人奴隷の割り合いとなり，それ以降白人・黒人共に増加の傾向はあったものの，両者の比率はあまり大きく変わってはいない。また，次の表は，1764年～1774年及び1779年～1788年の間の奴隷輸入の数字と出身地を示したものである[8]。

1.	Gold Coast (Annamaboe, Gold Coast)	10,674
2.	Southern Nigeria (Bonny, Calabar, Old Calabar, Benin)	13,877
3.	Liberia (Windward Coast)	2,679

4.	Dahomey (Whydah, Papaw)	2,567
5.	Angola	1,894
6.	Gambia	95
7.	(Unidentified	6,039)

この資料からも明らかなように，大多数の奴隷は主としてGold Coast及びSouthern Nigeriaの出身であり，アフリカ北部（Gambia）やアフリカ南部（Angola）の出身者は極めて少ないことが分かる。

4. ジャマイカン・クレオールへの移行

18世紀になると，奴隷貿易の利益を自覚したアフリカ人同士の内戦・混乱が多発し，また貿易の主導権を握っていたポルトガル，オランダ，イギリス，フランスなど欧州諸国間での会社経営と貿易利権をめぐる戦いが激化する。一方では西インド諸島及び南北アメリカでの奴隷の需要が益々増加する傾向があったことなどから，奴隷船は安全で確実な積荷を求めて，その活動範囲を益々広めざるを得なくなった。このような事情から，1807年～8年に奴隷貿易が終りを遂げるまでに，以前をはるかに上回る数の奴隷がthe Bight of Benin, the Congo及びAngolaなどから，ジャマイカに送り込まれることとなった。したがって，Jamaican Creoleの形成過程を考える際には，英国の統治が始まった1655年からほぼ50年間と，18世紀に入ってからの約100年間との二つの段階に分ける必要があろう。

まず，第1期（1655年～1699年）は，Twi, Fante, Eweなどの言語を話すゴールド・コースト及びその内陸部出身の集団が主流を占めてはいたが，単一の共通語をもたない大多数の西アフリカ人奴隷達とEngland西部，Irish及び北部（Northern）方言を話す，あまり教育を受けていない比較的少数の白人達との間での限られた，しかも束縛された状態での接触の時代である。この頃生まれた新興のPidginはそれ以前からLeeward IslandsやBarbados島に住んでいた人々の英語の発話の影響を受けていたと思われること，つまりその前世紀を通じてすでに確立されていたポルトガル系ピジンやその後を継いだ英語系ピジンの影響を受けた

カリブ海特有の語法（Caribbean Usage）を備えていたと考えられる点が特色である。

第2期（1700年～1808年）は，益々増大する新たな奴隷達，特にBight of Benin, the Congo及びAngolaの出身者達の比率が著しく増大していった時代である。したがってこれら新世代の奴隷達と，それまでにすでに定着していたクレオールを話す旧世代の奴隷社会の人々との間の接触や，次第に増加しつつあったスコットランド系の英語母語話者との接触など，初期にはみられなかった新しい傾向が特色である。社会構造がより複雑化し，各社会階層のグループに共通のいわば“lingua franca”としてのCreole Englishが容認されるようになった時期でもある。具体的には，例えば新・旧奴隷達の間で，Creole whitesと奴隷達との間で，徐々に増えつつあった有色自由民の社会で，さらにCreole whites同士の間でさえも，クレオールが共通語として使われるようになったのである。英語の母語話者達も，特に黒人奴隷達との接触の多かった帳簿係，監督，職人達などもこの種のクレオールを使う習慣が身に付いたであろうことは想像に難くない。

5. 脱クレオール化

18世紀の終りにハイティ（Haiti）からフランス語を話す難民が流入したり，19世紀の半ば頃に，Yoruba語を話すアフリカ人達が，年季奉公人として新たに到来したり，さらに中国系，東洋インド系，ポルトガル系などの労働者達の流入などもあったが[9]，Jamaican Creoleに大きな流れの変化を与えたのは，19世紀以降のキリスト教宣教師達による教育活動であった。教育により，標準英語がモデル言語となったために，クレオールの特徴が少しずつそぎ落とされ，より標準英語に近づく，いわゆる脱クレオール化（decreolization）現象が生じたのである。だが，一方では，奴隷解放により，かつての奴隷達が大農園（プランテーション）から山間部の人里離れた地域に移り住み，小作農社会へ離散していったことにより，逆に伝統的で保守的なJamaican Creoleを維持することになった。この結果生ずるのが，いわゆるクレオール以後の変種の連続体（post-creole continuum）と呼ばれる状態である。即ち，標準英語を一方の極とし，これから最もかけ離れた下層変種（basilect）（例えば，山間部に

孤立して小作農を営む無教育な人々の発話に代表されるような，伝統的クレオールを最も色濃く残した変種）をもう一方の極として，その中間を何種類かの変種（mesolects）が占める一連の連続体が次第に浮き彫にされてゆくのである[10]。

例えば，*face* の発音を例にとってみると，Jamaican English では次のような変種がみられ，一種の post-creole continuum を形成している。

RP	[féis]
acrolect	[féis]
↑	[fes]
mesolect	[fiés]
↓	
basilect	[fíes]

Jamaican Creole の特徴を最も強く残した（broad）下層変種（basilect）としての発音は，下降二重母音を含んだ［fíes］であり，これより少し教育のある話者は，上昇二重母音を用いて［fiés］と発音する。これを緊張を伴った短い単母音で [fes] と発音すれば，さらに上層変種 (acrolect) に近づき，最も標準的な RP（容認発音）に近い発音を身につけた話者は下降二重母音/éi/を用いて［féis］と発音する。しかし，これも完全な RP とは異なり，より緊張を伴った閉口母音的な特性をもった発音となる[11]。

一般に，この種の連続体が生ずるためには幾つか条件が必要である。まず第一に，標準英語を習得するための動機付けがあることである。ジャマイカでは，常に標準英語を習得することの利点がある。習得することによって自分の生活を改善することができる。例えば，希望する職場に就きやすくなるのである。第二に，社会を構成する階層間に流動性 (social mobility) がなければならない[12]。つまり，より上層の階級へと移行できる可能性が，その社会で許されねばならない。この社会的流動性が，実は標準英語との接触の機会を生むことになり，脱クレオール化が促進されるのである。第三に，黒人同士に差別意識があることもこの種の連続体の維持に貢献し得る。例えば，ジャマイカで生まれた若い世代の黒人達は，標準的な英語を一旦身につけると，アフリカ出身の黒人

達を“salt-water Negroes”とか“Guinea birds”などと呼んで軽蔑するという[13]。また，17世紀半ばの初期時代にジャマイカに来てピジンを身につけた奴隷達は，それ以降に流入したアフリカ奴隷達よりも優位に立ち，新参奴隷達を見下し，さらに逃亡奴隷達が加わっていた山岳部のMaroon植民地域[14]をも支配していたという。彼らの使っていたクレオールは，まさにその後の保守的なbasilectの基礎となったといえるのである。

NOTES

◎この論文は平成3年度大学特別研究助成「現代英語の多様性」の研究の一部である。

1) ピジン化（pidginization）を単純化のプロセス（simplification）とみなす考え方がある。文法面や音声面を標準英語を基準にして比べれば，確かに単純化されている側面もあるのだが，例えば動詞の三人称単数形の｛-s｝の欠如や，二人称代名詞 *yu* の複数形に，別の形 *unu* を設けるとか，*five books* の複数語尾｛-s｝は，情報過多であるから必要としない，などは実に合理的である。この種の側面をも考慮して，あえて「合理化のプロセス」とした。
2) ただし，バージン諸島は例外で，アメリカ英語の影響が強い。
3) Frederic G. Cassidy. 1961. Jamaica Talk. London: Macmillan & Co. Ltd. p. 4-7.
4) ただし，Cassidy（1961：10-11）に，次のような記録が報告されている。即ち，「1671年から1675年にかけてSurinamからの植民者と共に，アラワク族とみられる31名のインディアンがジャマイカに入国した。また，1687年～？に，逃亡奴隷の捜索のために，現在のニカラグア（Nicaragua）のあたりからMosquito Indians（Misumalpan語を話したという）が雇われ，ジャマイカに入国し，そのまま定住した者がいる。」これらの，いわば移民が何らかの直接的影響を与えた可能性が完全にないとはいえない。
5) J. Holm. 1989. Pidgins and Creoles. Vol. Ⅱ. Cambridge: Cambrige University Press, 470.
6) F. G. Cassidy and R. B. Page. 1967. Dictionary of Jamaican English. Cambridge: Cambridge University Press. xli.

7) Cassidy, *op. cit.*, 16.

8) *Ibid.*

9) 今世紀に入ってからは，パナマ（Panama）や中央アメリカの他の地域，及びキューバ（Cuba）からの移住労働者の帰国により，かなりの Hispanisms（ラテン文化）がジャマイカに紹介（導入）された。また，米国，カナダ，英国との増大しつつある関係は，教育の機会の増大やジャマイカ島内の相互理解と相俟って，地域の各種方言（変種）をさらに修正する一助となってきた。

10) このほかに，標準英語に最も近いクレオールの変種として acrolect というラベルがある。いずれも，W. A. Stewart（1964）がワシントン D. C. の黒人英語を上層変種（acrolect）と下層変種（basilect）とに分けたのがきっかけで一般化した。

11) Cassidy and Page, *op. cit.*, xl.

12) R. Allsopp. 1958. "The English Language in British Guiana." *English Language Teaching* 12(2): 59-66.

13) Cassidy, *op. cit.*, 18.

14) 英国がジャマイカを統治する以前に，スペイン人によって西アフリカから送り込まれた奴隷達の一部が山間部に逃亡し，最初の逃亡奴隷移住（植民）地（Maroon settlement）となった。

REFERRENCES

Allsopp, R. 1958. "The English Language in British Guiana." *English Language Teaching*. 12(2): 59-66.

Cassidy, Frederic G. 1961. *Jamaican Talk*. London : Macmillan & Co. Ltd.

Cassidy, F. G. and R. B. Le Page. 1980. *Dictionary of Jamaican English*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.

Holm, John. 1988. *Pidgins and Creoles*. Vol. Ⅰ & Ⅱ. Cambridge: Cambridge University Press.

Hymes, D. ed. 1971. *Pidginization and Creolization of Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.

Le Page, R. B. ed. 1961. *Proceedings of the Conference on Creole Language Studies*. London: Macmillan.

Mühlhäusler, P. 1986. *Pidgin & Creole Linguistics*. Oxford: Basil Blackwell Ltd.

Romaine, S. 1988. *Pidgin and Creole Languages*. Harlow, Essex: Longman Group UK Ltd.

Stewart, W. A. 1964. "Urban Negro Speech: Sociolinguistic Facters Affecting English Teaching." In Shuy. (ed.) 1964. *Social Dialects and Language Learning*. Champaign: NCTE. 10-19.

Sugimoto, T. 1989. "Variation in Contact Languages." *Seijo Bungei*. No. 119.

Sutcliffe, David. 1982. *British Black English*. Oxford: Basil Blackwell Ltd.

Taylor, D. 1977. *Languages of the West Indies*. Baltimore: The John Hopkins University Press.

Voldman, A. ed. 1977. *Pidgin and Creole Linguistics*. Bloomington: Indiana University Press.

Wardhaugh, R. 1986. *An Introduction to Sociolinguistics*. Oxford: Basil Blackwell Ltd.

Wells, J. C. 1973. *Jamaican Pronunciation in London*. Oxford: Basil Blackwell Ltd.